

Title	交誼と報謝 : 秋成晩年の歌文
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2010, 95, p. 12-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

#### 交誼と報題

――秋成晩年の歌文―

#### 交誼としての歌文

九年が没後二百年になる)。た(秋成の没年は文化六(一八○九)年であり、正確には二○○た(秋成の没年は文化六(一八○九)年であり、正確には二○○二年が八十二十九日まで、京都国立博物館二○一○年七月十七日から八月二十九日まで、京都国立博物館

だという趣旨である。

この展示の狙いは、孤高の怪異作家というイメージの強い秋成だったのして見せることだった。むしろ、それこそが素顔の秋成だったの大に感謝しながら生きていた晩年の秋成を、その自筆資料を通をれに感謝しながら生きていた晩年の秋成を、その自筆資料を通るに、近世上方文壇の中で、様々な文人たちと交の別の顔、すなわち、近世上方文壇の中で、様々な文人たちと交の別の顔、すなわち、近世上方文壇の中で、様々な文人たちと交の別の顔、すなわち、近世上方文壇の中で、様々な文人にある。

出せるが、そこには「大坂出生ノ人」歌道の達人」と記されてい化六年六月二十七日の条に、秋成の法名「三余斎無腸居士」が見秋成の墓のある京都西福寺に伝わる『簿霊帳』(過去帳)の文

飯倉洋一

で」というニュアンスが読みとれる。やってのけた。「大坂出生の人」には、「大坂人なのにこの京都人」と呼ばれることは、常識的には難しい。しかし秋成はそれをになって移住した人物が、雅文芸の代名詞ともいえる和歌で「達る。雅文芸の拠点であった京において、大坂から老年(六十歳)

文を記したことがある。「畸人秋成の世界」11)。とについては、『京都新聞』二〇一〇年六月十六日付朝刊に、拙はなく、神や人とつながるための重要な媒体でもあった(そのこ秋成に限らず江戸時代の人々にとって、歌文は、単なる作品で

めに作られたのだという確信を得るに至った。歌文の多くが、人々との交誼のために、あるいは神への報謝のた上田秋成展の準備に関わることで、筆者はとくに晩年の秋成の

、追悼などである。歌合・歌会や和文の会での創作もそこに入ひとつは、歌文そのものが交誼の中から生まれる場合。贈答、「交誼としての歌文」という時に二つの場合が考えられる。

でさえ、特定の読者への贈呈が想定されていたことは後述する。は、ほとんどがそういうものだと考えてよい。刊本『藤簑冊子』くまれる作品のうち、自筆清書稿・代筆清書稿とみなされるものれてよい。『上田秋成全集』の歌文篇(第十巻~第十二巻)にふ

的な感懐など別のモチーフであっても、清書する時には、

・誰かの

相手の状況が詠み込まれているわけではない。つまり元々は個人

いまひとつは、歌文を交誼の手段として使う場合。歌文自体に、

前者は歌文の内容が問題であるから、『上田秋成全集』等のテを複数の相手に贈ることがある。極端なケースでは『藤簍冊子』に「しるしらぬ人の、齢つめりとて、いはひの歌こふ毎に、ひみに一九八五年の日本近世文学会秋季大会(於九州大学)でちなみに一九八五年の日本近世文学会秋季大会(於九州大学)でちなみに一九八五年の日本近世文学会秋季大会(於九州大学)でちなみに一九八五年の日本近世文学会秋季大会(於九州大学)でちなみに一九八五年の日本近世文学会秋季大会(於九州大学)でちなみに「かった」という場合である。その結果同じ歌や文章顔を思い浮かべているという場合である。その結果同じ歌や文章顔を思い浮かべているという場合である。

握しておくことは重要であろう。 ち前者と後者は截然と分かれるわけでもない。だが混同せずに把装丁、書としてのあり方をも問題にしなければならない。もっと装丁、書としてのあり方をも問題にしなければならない。もっと 
装丁、書としてのあり方をも問題にしなければならない。もっと 
特別では不十分で、形態(短冊・色紙・巻紙など)、料紙、 
特別では不力では重要であろう。

### 一『藤簍冊子』と蘆庵社中

識されているはずである。 たとえば、その歌文の選択・配列において、それらの人々が意

ぞれに牡丹を主題に、特にその色を詠み込む形の競作をしている。沢益(「朱砂紅」)・昇道(「紫」)という蘆庵社中の人々が、それに、「朱砂紅」)・前波黙軒(「白帯紅」)・田山敬儀(「深紅」)・だてに」という秋成の和歌二首に続いて、羽倉信美(「浅紅」)・だてに」という秋成の和歌二首に続いて、羽倉信美(「浅紅」)・だてに」という秋成の和歌二首に続いて、羽倉信美(「浅紅」)・様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、「大田・一様に、 「大田・一様に、 「「大田

に違いないので、ここで名前を出したのである。
が窺える八首である。彼らは秋成の家集を出すことに尽力した
詠歌であったのかどうかはわからないが、秋成と蘆庵社中の近し
詠作年次は没後の享和元年七月以降であろうか。一同に会しての
彼らは、蘆庵門下の有力者であるが、蘆庵の名が見えないから、

書き下してみよう。 文の文章で、その親密ぶりを窺うことができる。その前書部分を 秋成の「嵐山夕暁」の顰みに倣った昇道の「桜天幷序」という漢 、のでは中との雅交については『藤簍冊子』の中でも、巻六に、

み。実に癸亥二月十九日也。まず、予復た顰に倣ひ桜天篇一章を賦す。聊か余勇を買ふのまず、予復た顰に倣ひ桜天篇一章を賦す。聊か余勇を買ふの調ふべし。無腸翁夕暁の篇有り。叙事歴々、人をして遺想止謂ふべし。無腸翁夕暁の篇有り。叙事歴々、人をして遺想止清原豊常、桜花の宴を西峨に設く。会ふ者無腸老翁、小川布清原豊常、桜花の宴を西峨に設く。会ふ者無腸老翁、小川布

ることは少なくない。 美宅に寓居し、近くには常に昇道がいた。彼らが聞書や代筆をすきに寓居し、近くには常に昇道がいた。彼らが聞書や代筆をすこにも登場していることが分かるだろう。このころ秋成は羽倉信こ癸亥」は享和三年である。牡丹競作とほぼ同じメンバーがこ

秋成を自宅に小庵を建てて引きとる。秋成はそれからしばしば下配慮が目立っている。寛政十年の冬、信美は、妻瑚璉尼を失った『藤簍冊子』では、蘆庵社中の中でも特に羽倉信美に対しての

う。

「はしているが、文化三年八月に西福寺に移るまで、七年弱そこ坂はしているが、文化三年八月に西福寺に移るまで、七年弱そこ坂はしているが、文化三年八月に西福寺に移るまで、七年弱そこ坂はしているが、文化三年八月に西福寺に移るまで、七年弱そこ

本歌集において、秋成と昇道は、信美に最大限の敬意を払った。本歌集において、秋成と昇道は、信美に最大限の敬意を払った。初間の信よしの家の屏風に、えらぶとはなしに、かいすさめを、荷田の信よしの家の屏風に、えらぶとはなしに、かいすさめを、荷田の信よしの家の屏風に、えらぶとはなしに、かいすさめる歌」とあり、「都辺はちまたの柳園の梅かへり見多き春に成にる歌」とあり、「都辺はちまたの柳園の梅かへり見多き春に成にる歌」とあり、「都辺はちまたの柳園の梅かへり見多き春に成にる歌」とあり、「本歌集において、秋成と昇道は、信美に最大限の敬意を払った。

そして巻一の掉尾を飾るのは、秋成と信美の贈答歌である。

枕にはよらぬ習ひのこよひしも秋のわかれをかねてをしまんひて、歌よめといふに、読る秋はつる日、信よしの家に、庚申をまつらるゝにいきあ

たが宿も枕によらぬこよひとて行秋さへもとまらざりけり

しているのか」とひねくれていると、日暮れに信美がやってきて、詠んでほしい、明日また来ます、と言って帰ったのを、「私を試さらに巻二にも、荷田信郷が秋成の許を訪れ、「客中歳暮」を

詠むことを慫慂してくれたという前書の長歌がある。 これなど、 も重なる和歌がある。

信美への感謝がにじみ出ている前書である。

いる。それに続く「御嶽さうじ」は信美の家での「昔がたり」を

文末注記の付いた紀行文である。

"あるじの信美さかしく筆とりて、

かいつらねられし也」という

和文でものしたもの。「右賀荷田信美之新室詞」と末尾に記して これは寛政十一年に作られたものだが、巻四の「年木」はそれを おなじく巻二には「賀荷田信美之新室歌」という長歌がある。 山ざとの二木の松の声あひて秋のしらべは聞べかりけ まとごとかきあはせ、あるじせられしに、よめる、 小澤蘆庵をはじめてとひゆきし時、 翁さうの琴、橘の経亮や

山陰のふた木の松の秋の声人に聞るゝ時もまちけ

かへし

ŋ

二木の松とは、此庵の庭もせに、年深きが立つをもてい ひよするなりき。翁世を去れし時にも、

玉琴の緒はたちしかば君が庵のふた木の松よたゞ秋の声 南禅寺の庵に有し時

君がすみ宿の水音聞つれば濁るこゝろもあらはれ

にけり

我庭のさゞれ石こす谷水のすむとばかりは人目なりけ 年の暮には、いつも炭を切て贈らるゝに、よみてかへせ かへし

漢文に次いで、信美・信愛(信美の子)・昇道の和歌がある。

『藤簍冊子』所収の和歌・和文は、秋成の文業のエッセンスで

一面では、蘆庵社中、特に信美への気配り

たちが文や歌を寄せている。細合半斎・雲林院玄仲・大田南畝 秋成が寿蔵を卜したことを記した文章(「こを梅」)に続いて友人 社、一九九八年所収)が、信美はここでも登場する。

享和二年、

「雑居するテキスト―『藤簍冊子』総論」『近世和文の世界』森話

巻六は、友人との交誼を生成の場とした和文が多い

(風間誠史

うづみ火のすみつきがたき都にも思ひをおこす友はありけり

思ひやるかひこそなけれ埋火のすみつきてたゞひさにあれこ

都合七首。二人の温かい友情が窺える一連である。これだけの

贈答を収録したのは家集中異例であり、

また蘆庵を「翁」と呼ん

ないかと思われる。 た歌番号)からの七首は、 蘆庵の追悼のために配されたものでは なっていただろう。

巻二の五五五五番

(新日本古典文学大系『近世歌文集下』の付し

に満ちた選・配列であったことがうかがえる。

おそらく、出資の面でも昇道をはじめとして蘆庵社中が中心に

とすれば蘆庵に対する扱いが気になるところ

そ

あることは確かだが、

蘆庵の『六帖詠草』や秋成『麻知文』などと

15

じられよう。でいるのは、秋成の、というよりも蘆庵社中の蘆庵への敬意が

感

わっているが、これも周到な配慮だと言えよう。ない。『文反古』もまた、松本柳斎をはじめ蘆庵社中が深くかかとの贈答を数多く収めている『文反古』(文化五年刊)に重複がなお、これらの和歌は、『藤簍冊子』の姉妹編で、やはり蘆庵

## 三 神恩への報謝―加島稲荷

周知のように、秋成は五歳の時に痘瘡に罹り、生死をさまよったが、養父が加島稲荷(現大阪市香具波志神社)に祈願したとこたが、養父が加島稲荷(現大阪市香具波志神社)に祈願したとこのは罰だと受け止め、「天罰七十余載」(『海道狂歌合』序)などと署名することもあった。

歌帖』である。題を羽倉信美が選んでいる。『献神和冊帖に仕立てさせたものが、現在香具波志神社に伝わる『献神和首の短冊に貴顕三名・知友七名の各一首の短冊を加えて奉納されたのを、天保二年の段階で当時の社司藤家明が、散逸を恐れて短たのを、天保二年の段階で当時の社司藤家明が、散逸を恐れて短に、秋成は神恩を謝して和歌を奉納する。もともとは自詠六十八成となった秋成は、加島稲荷享和元年九月、神託の通り六十八歳となった秋成は、加島稲荷

とくである。 口に、神社の繁栄を寿く和歌を依頼している。その和歌は左のご秋成は奉納にあたって、三条西実起・日野資枝・芝山持豊の三

日のひかりのどけき春はもろ人のゆきゝたえせぬみづの玉がき

あふぐ此神ものどけき春にあひていのるねがひはみつの玉がき

稲荷山ねがひもみつのともしびにあふげばたかき神のみやしろ

あったに違いない。 あったに違いない。 あったに違いない。 のおそらく宮中に出入りする非蔵人の羽倉信美あたりの仲介がある。この手間のかけ方に並々ならぬ秋成のこだわりがうかがえろう。この垣間のかけ方に並々ならぬ秋成のこだわりがうかがえた。 表断されたもので、同じ打曇りの意匠である。この短冊が神社を裁断されたもので、同じ打曇りの意匠である。この短冊が神社を

中 好み短冊のデザインに非常に近い。 い小豆色の線が上下に入った短冊に書かれている。 七社を題として和歌を寄せているが、これらはすべて、朱より濃 かれたものである。その冒頭は、「六十あまり八とせの齢つも 倉信美・富田延秋という七人の知人が、 つゝ立居老せぬ春にあふかな」と、 などの人々だから、 また藤島助功・羽倉能信・鴨脚光連・松室重恭・小川 秋成の六十八首も、全て上下に朱の線が引かれた好み短冊 秋成の添書きには 信美が歌を集めた可能性が高いだろう。 感謝の意を素直に詠 蔵人・非蔵人・社司・蘆庵社 伊勢神宮をはじめとする 秋成の朱引の 布淑・羽 んでいる。 に 0

頼る。今度以て高貴及び知音の題詠を乞ひ、且余の齢算を賦是に因りて詣拝すること数十載、寿六十八、全く神の恩霊に還りて、條然として九死を出づ。而して旬日を経て乃ち愈ゆ。った、幼穉にして悪痘を患ふ。医云はく、生路無しと。先考悲余、幼穉にして悪痘を患ふ。医云はく、生路無しと。先考悲

この献納にどれだけの思い入れをしたかが伺える記述がある。るが、折帖に仕立てられた際に付された藤田顒の序には、秋成がとあって、詠歌が神恩への報謝という行為であることを示してい

奉幣と為す。

(原漢文

神廟に献ず。(原漢文)神廟に献ず。(原漢文)神廟に献ず。(原漢文)の大行田信美をして題を選ばしめ、一題出す毎に、乃ち声に応じて咏み、手筆を釈さず、崇朝ならずして六十八首成る。日じて咏み、手筆を釈さず、崇朝ならずして六十八首成る。日と、是れ神の吾に賜る数なり。敢へて踰越せず、謹んで之を本願に献ず。(原漢文)

事実を伝えているかどうかはともかく、秋成の思いは伝わってく出して詠み、筆を離すことなく、一気に六十八首を成したという。出して詠み、筆を離すことなく、一気に六十八首を成したという。

ところで、先述の秋成展では、香具波志神社所蔵の大岡春ト画

共同制作ではない。

共同制作ではない。

本書き入れている。しかし春トは宝暦十三年に没しており、秋成を書き入れている。しかし春トは宝暦十三年に没しており、秋成の筆跡は秋成展の図録(『没後二○○年記念上田秋成』日本近世の筆跡は秋成展の図録(『没後二○○年記念上田秋成』日本近世文学会、二○一○年)の長島弘明解説によれば寛政ごろの筆跡である。この画に秋成が賛華良堂が若い時に師事した大坂の絵師である。この画に秋成が賛華良堂が若い時に師事した大坂の絵師である。この画に秋成が賛

それは何らかの行為(交誼・報謝)としての文芸なのである。レーションであるとは限らない。しかし、そうでないとしても、の報謝ということになるだろう。画賛はすべてが画者とのコラボむしろ、秋成の賛の書き入れは、六十八首献詠へと連なる神恩へが蔵していた加島稲荷の宮司の依頼によるものであるとすれば、

## 四 「神医」への報謝―谷川家伝存の歌文

条家など公家諸家に出入りした。 弟である。「金毘羅横針之術」を会得し、名医として知られ、 保十四年没、八十二歳)·良正(天保九年没、六十九歳) 住んだ眼科医の谷川良順(天保十二年没、八十二歳)・良益 十五又及右眼、 秋成の自伝でもある『自像筥記』に、「歳伍十七左眼失明、 「神医」とは、 当主谷川好一氏(十八代目)のもとには、 秋成晩年の著述を可能にした。 僥倖逢神医、得左明」と書かれた一節がある。 もと大坂新町西口、 両眼失明していた秋成の眼を治 谷川家は、 のち播磨国加東郡屋度村に 貴重な秋成遺墨が 現在も屋度にあ の三兄 웆

多数伝存している。

報謝の意味がある。

報謝の意味がある。

報謝の意味がある。

「会別の意味がある。

し、工夫も少なくない。「報謝としての歌文」という観点から注目されるのは、その独特の書風に魅せられていた。秋成が谷川家に寄が、書としての芸術性を有していることである。秋成の書跡を求が、書としての歌文」という観点から注目されるのは、それら

の部分の文字はない。 暁ごとに起なれて雲の 返っての表現であり、 る。「冥福蔽天資 すほどの迫力のある豪放な筆致には、ただならぬ気魄が感じられ 秋成が没した文化六年の書であることがわかる。墨を余白に散ら 絵から、それは茶であることは明白である。しかし他にも残る歌 上田秋成展に出品され、絵葉書にも採用された、 自画賛を見てみよう(図1)。署名に七十六翁作とあって、 厄貧顕奇才」の詩句は、 中央下部に描かれた煎茶用の焜炉と急須 強烈な自負が感じられる。 啜る命なりけり」と読めるが、() 自らの生涯を振り 歌は、「霜雪の 和歌 霜雪

(図2、本紙五八・二×三二・三糎)と比べると、やはり谷川家嘆声が聞えてきそうである。試みに、同じ意匠の秋成の自画賛五七・五糎の大幅で、見映えがする。この書を掛けた谷川兄弟の五七・五糎の大幅で、見映えがする。なにより、本紙一二六・五×うである。雲は古来中国では茶に喩えられる。一種の絵文字のよらである。雲は古来中国では茶に喩えられる。一種の絵文字のよらである。



図1 和歌「霜雪の」 (谷川好一氏蔵)

図2 和歌「霜雪の」(個人蔵)

335 けるえべるか

和歌「大井川」

(谷川好一氏蔵)

図 3

の時の作品。 次に和歌「大井川」五首(図3)を見てみよう。秋成七十五歳所蔵のものが引き立つ。

なだす後の

園天皇母)の御局頭であった「梅田」の眼病治療のため参上し、寛政六年、関白一条輝良の姉で、女院御所(桃園天皇皇后、後桃暦の縦長の料紙に書かれているのも、流れる川を思わせる。 を川家は、秋成を治療した三兄弟の時に最も名声が高かった。 谷川家は、秋成を治療した三兄弟の時に最も名声が高かった。 を川家は、秋成を治療した三兄弟の時に最も名声が高かった。 を別した。 を別のといるのも、流れる川を思わせる。 を別のといるのも、流れる川を思わせる。

見事に完治させたため信頼を得、一条家への出入りを許されるようになる。秋成が土佐日記や万葉集を進講していた正親町三条公うになる。秋成が土佐日記や万葉集を進講していた正親町三条公則からは「遠つ親の業をつぎて、家の風を世に薫ずるこそ、いと則からは「遠つ親の業をつぎて、家の風を世に薫ずるこそ、いと則からは「遠つ親の業をつぎて、家の風を世に薫ずるこそ、いと則からは「遠つ親の業をつぎて、家の風を世に薫ずるこそ、いと則からは「遠つ親の業をつぎて、家の風を世に薫ずるこそ、いと別からは「遠つ親の業」の記述は、一条家への出入りを許されるよりになる。

を同じ意匠の短冊で献じたのも、秋成の報謝の言葉を彼らを媒介た。六十八歳の時、加島稲荷に、公家とそれに連なる人々の和歌いた谷川家に対して、貧しい一文人の秋成が出来ることであっいた谷川家に対して、貧しい一文人の秋成が出来ることであっいた谷川家に対して、貧しい一文人の秋成が出来ることの最大の秋成にとって、谷川兄弟とは単なる眼科医ではなく、特別な力秋成にとって、谷川兄弟とは単なる眼科医ではなく、特別な力

春・秋と、曇り地に金泥蝶・銀泥鳥散らし模様の夏・冬の二 現在も谷川家に蔵され、 のぞし。 を報告、「貧老聊重恩を酬奉已」と述べている。 日野資枝に代わって高辻胤長の作詩を呈上することができたこと というのである。 去し、その代わりがなかなか見つからないので、とりあえず夏 冊を献上しようと努めたが、 乞方機縁無之、 家御詠歌四季、 文」のレベルでは、 にして伝えるという意味があったからだろう。 (葉室頼熙)、 享和元年十一月の谷川良益宛秋成書簡に、「前会申約候、 そのようなイメージが強い秋成だが、 秋 先三紙差上候」とある。 申乞候処、 (芝山持豊)、 翌年一月十一日の良順・良益・良正宛書簡で、 やはり貴顕の書は尊いと考えてい 金銀段霞に菊花散らし金銀砂子模様 春歌日野一位資枝卿薨去故、 春歌を賜る予定だった日野資枝が死 冬 (烏丸光祖) 貴顕の手になる四季の の三紙を献上する 「報謝としての 「公家なにするも この四季短冊は るのである。 他へ可 一種で、 短短 和神 歌 由 0

秋成 年に贈られ 使用されたものを手に入れて贈呈したものと思われるし、 際に詠まれ に作られたものを秋成が入手して贈ったということが谷川良正宛 ているが、 0 また上田秋成展で展示された小忌衣は、 风書簡 み心づくしのきせ綿にうたてしぐるゝ秋菊の花」 からわ 大田 た古歌を書きつけていることから、 たと推定される菊の着せ綿は、 かる。 「南畝の『蜀山余録』によれば、 これに小懐紙に書きつけられ 秋成筆で賀茂臨時 後桜町院の御所 南畝にも菊の着せ 賀茂神社で実際に た和歌 が付され 享和二 で実際 祭の

非常に見映えのするものである。

これらの贈呈品は、貴顕の周辺や神社から入手したものであ綿に同じ和歌を付して贈ったことが知られる。

秋成にとって特別なものだったと知られるのである。「神」への奉納として相応しいものであろう。谷川家との交誼

文化五年、

秋成は良益宛に、

形見の書とともに書簡

を贈

涯 あるまじく候。良順様、 前 口 0 症漸々によろしく候へども、 略) 被下候。 御たいめんは仕間敷く候。一 御いとま乞に下坂いたすべ 盲眼の手ならひ十一 良益様、 足たちかね候へば、 段泰山 一紙入御覧候。 いづれへもよろしく御つた く候 日の御恩、 へども、 長くか 去 わするゝ世 もはや生 春 来 たみに 浮

御

とゝめ下されたく候

は他 するのは珍しい。 えたのではないかと思われる。 川家に遺された秋成書簡類で、 している約十八メート 交互に配し、 願いが叶って、 て掛けると、書としても立派に通 半 後に -紙三枚に記されたこの書簡は、 にないことから、 『春雨梅花歌文巻』について触れておこう。 春雨にはじまり、 今日まで大切に保存され続けているの これ も奉納 秋成が手紙自体も形見に遺してほしいと考 ルの巻紙として現存するこの歌文集は、 0 意識 このように大きな紙に書かれ 春雨に終わるという形で首尾呼応 秋成が自書を残してほ 用するものである 字配りの案配もよく、 に近いゆえでは ない 歌と随 であ しいと依頼 4 た例

り



こればかりは神代がたりにくはへて、

のこせよかしとも思は

谷川良正宛秋成書 簡(谷川好一氏蔵)

詳らかにしない。 ては鷲山樹心『秋成と幻の筆アダン春雨梅花歌文巻』和泉書院、 果筆致が異なることなどが特筆されるものである(本作品につい 九九二年を参照されたい)。 秋成の谷川家に対する並々ならぬ敬意が明らかになる。 次のようである。 しかし、 これだけの作品を贈っ 本作品が谷川家に伝わった由来は たということ自 その

的事実が記されていること、歌と文で使用した筆が違い、

0

)時期の秋成の作品として異文がないこと、

きわめて重要な伝記

と記している。

文化五年の春二月廿七日のあしたに筆は抛つ、

七十五歳の盲叟

大阪府立中之島図書館蔵の『神代がたり』の末尾に「このふみは、

春雨梅花歌文巻』と同日同時に擱筆していることが注目される。

"神代がたり』とは、『日本書紀』『古事記』の神代の評釈で、

その結

体

図 4

春雨又一 すにははたしなんとて、 夜降あかして、 いこそねられ ね 神代がたり、 けふ

和 歌四首 (省略

たのうら怖しきばかりに止 かた言にうみつかれしかば、 歌もすゝまず、 八雲たつの御う

文化五年春二月廿七日のあした、 瑞龍山下狂蕩子七十五齢書記す 筆抛すてぬ

> それにしても、真偽はともかく、秋成は一年後の文化六年二月に の著書としては重大な問題を孕むものであった。 は本書を天覧に供しようとしていた(天理図書館 である。その著作と『春雨梅花歌文巻』が、同じ日の朝に、とも に筆を抛つ形で完成するというのは、 『神代がたり』(中之島本) は大本で百丁を越える堂々たる著作 もちろんレトリックだろう。 本奥書)。

書すこと自体は、 和 いだろうか。 た一万代の国の鎮めと神代より仰げば空に神のうつしみ」や、 神代」に関わる二幅がある。 「神代より神と仰げる神の国よもぎが島と呼も久しき」とい 歌は 谷川家に贈呈された秋成自身の手になる書に、 『藤簍冊子』にも見え、 あるいは 『神代がたり』と深く関わるの 最晩年の筆跡と目される。 旧作ではあるが、 富士の図に賛し 「神代」 前者 では 0 歌を う、

れたのかもしれないと、 神」である谷川兄弟にも天皇と同様に 想像したくなるのである。 『神代が たり から ?贈ら

# 五 むすびにかえて―『春雨物語』への視座

「交誼としての歌文」「報謝としての歌文」は、まだまだ多くの「交誼としての歌文」「報謝としての歌文」は、まだまだ多くのない。では、その他については省略に従い、別の機会を待とう。だけを述べ、その他については省略に従い、別の機会を待とう。だけを述べ、その他については省略に従い、別の機会を待とう。が成と信美という親密な関係を背景に考えるとそれは必然ともいればと信美という親密な関係を背景に考えるとそれは必然ともいればと信美という親密な関係を背景に考えるとそれは必然ともいればという。

られる。

関して拙稿「『春雨物語』論の前提」(『国語と国文学』二〇〇八美で伊勢下中ノ郷の人、西荘文庫本の旧蔵者が小津桂窓・長谷川元貞で同じく伊勢松坂の素封家の人、漆山文庫本の旧蔵者竹内弥蔵もまた伊勢の人であるところから、黒川春村の『古物語類字抄』に「春雨物語 勢州松坂駅 長谷川某所蔵、古巻軸一巻ありと、或人いへり」というところの長谷川某(桜山文庫本を写した長谷川元貞とは別人であろうと言われる。『上田秋成全集』第八人の注文に対する特別バージョンだった可能性がある。この点に人の注文に対する特別バージョンだった可能性がある。この点に大の注文に対する特別バージョンだった可能性がある。この点に大の注文に対する特別バージョンだった可能性がある。この点に大の注文を表している。

あるのではないか。羽倉関係者から譲られた可能性も十分に考え交友の深かった蘆庵社中の富岡維徳の血縁に連なることと関係がが何らかの方法で富岡本を入手したのだとしても、それは秋成と即賀文麗画秋成肖像の模写でも明らかである。仮にその子の謙蔵申賀文麗画秋成肖像の模写でも明らかである。鉄斎が秋成に強い関心あったことと結び付けたいところである。鉄斎が秋成に強い関心

穿鑿はこの場に相応しくないだろうから、ここで筆を擱く。宣長の生地である伊勢で流通したことになる。しかしこれ以上のプともいえる蘆庵社中の流れで伝わり、文化五年本は終生の論敵プともいえる蘆庵社中の流れで伝わり

付記 本稿を成すに当たり、谷川好一氏・香具波志神社の藤武行氏には資料閲覧・撮影に際し、大変お世話になりました。写真掲載をお許しいただきました谷川好一氏に深謝申し上げます。 また、京都国立博物館「特別展観 没後二百年記念 上田秋成」の準備を通して数々のご教示を賜った上田秋成展実行委員会の稲田篤信氏・木越治氏・長島弘明氏に謝意を表します。 なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究的「近世上なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究的「近世上なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究的「近世上方文壇における人的交流の研究」(二〇一〇年度~二〇一三年度、方文壇における人的交流の研究」(二〇一〇年度~二〇一三年度、新聞の一部である。

(いいくら・よういち 本学大学院教授)

年五月号)で若干ふれたことがある。

富岡本の出自は富岡謙蔵が所有していたこと以上に遡れないが

謙蔵の父鉄斎の叔父富岡維徳が、

秋成の歌友の小沢蘆庵の門人で